

# 愛知県立大学

## 教員の自己点検・自己評価

－ 自己点検・自己評価報告書 －



2017年度



# は し が き

愛知県立大学学長 高島忠義

今日の大学教員は、その本来的使命である教育研究だけでなく、その成果を社会に還元する「大学の第3の使命」としての社会貢献（中教審「我が国の高等教育の将来像」、学校教育法83条2項）、さらに近年は全学的な教学マネジメント（中教審大学教育部会審議まとめ「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」）まで、極めて広汎な営為を求められています。

そして、大学自体には、教員が上記の職務を果たしているかどうかについて自己点検・自己評価を実施し、それを公表することによって社会に対する説明責任を果たす責務が科されています（中教審「我が国の高等教育の将来像」）。当初、この自己点検・自己評価は、大学の努力義務にとどまっていたましたが、平成11年に法的義務化されるに至りました（学校教育法109条）。その後、当該制度は、従来の取り組みを、今後もより一層「充実・深化」させることを要請されています（中教審「学士課程教育の構築に向けて」）。

こうした状況の中、本学は、公立大学として、教員の公的な活動について広く県民に公開する責任があることを思料し、かなり早い段階から各教員の「自己点検・自己評価報告書」を作成・公表してきました。また、教育研究審議会に附置された評価委員会は、自己点検・自己評価の項目や方法を絶えず検証し、報告書がより一層有意な内容のものとなるように努力しております。その結果、平成23年度に実施された大学評価・学位授与機構の認証評価では、毎年「自己点検・自己評価書」を継続的に作成・公表していることが、本学の「優れた点」の1つとして評価されました。また、この認証評価と同時に選択的事項として同機構から評価を受けた「研究活動の状況」に関しても、本学が自己点検・自己評価を実施し、その結果を公表している点が高く評価されています。

近年は、周知のように、日本の大学が十分な高い質を保証しているかどうかについて「大いに問題がある」とされ、高等教育機関としての「質の保証」を強く求められています（中教審「我が国の高等教育の将来像」）。この点は、平成24年の中教審大学教育部会の上記まとめや中教審の答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」でも繰り返し指摘されています。本学としては、こうした批判や指摘に十分対応できるよう、今後とも教員自身による厳格な自己点検・自己評価を基礎とした、自主・自律的なPDCAサイクルを実施していく必要があると考えています。



# 愛知県立大学

## 教員の自己点検・自己評価

2017年度自己点検・自己評価報告書

### 目 次

#### 愛知県立大学概要

第1章 自己点検・自己評価の様式.....	1
1. 1 自己点検・自己評価項目 .....	1
1. 2 目標と自己評価 .....	2
第2章 自己点検・自己評価結果の概要.....	5
第3章 教員の自己点検・自己評価データ.....	15
3. 1 外国語学部.....	15
英米学科.....	17
ヨーロッパ学科.....	61
フランス語圏専攻.....	61
スペイン語圏専攻.....	81
ドイツ語圏専攻.....	103
中国学科.....	125
国際関係学科.....	147
多文化共生研究所.....	177
3. 2 日本文化学部.....	181
国語国文学科.....	183
歴史文化学科.....	201
3. 3 教育福祉学部.....	219
教育発達学科.....	221
社会福祉学科.....	253
3. 4 看護学部.....	281
看護学科.....	283
3. 5 情報科学部.....	387
情報科学科.....	389
3. 6 入試・学生支援センター .....	445
国際交流室.....	447
3. 7 教養教育センター.....	451
教養教育センター.....	453
3. 8 グローバル実践教育推進室.....	463
グローバル実践教育推進室 .....	465
おわりに.....	469

## 愛知県立大学概要

愛知県立大学は、1947年、愛知県立女子専門学校として創設されて以来、1966年の共学・4年制愛知県立大学の創立と外国語学部の開設をへて、1998年に長久手町に移転し、その際、情報科学部および文学部・外国語学部における3学科を新設し、昼夜開講制の全面実施、大学院国際文化研究科の設置を行ってきた。また、2002年には情報科学研究科を開設した。

一方、愛知県立看護大学は、1968年に愛知県立看護短期大学として創設されて以来、1995年に4年制の大学として開学し、1999年に大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を、また、2003年に看護学部助産師コースを設置し、2007年に大学院修士課程に専門看護師コース、2008年に看護実践センターに認定看護師教育課程（がん化学療法看護、がん性疼痛看護）を設置してきた。

新しい愛知県立大学は、2009年、「良質の研究に基づく良質の教育」をモットーとし、また、母体となったふたつの大学の良き伝統を継承しつつ、文系、理系双方の学部を擁する複合大学としてスタートした。外国語学部、日本文化学部、教育福祉学部と情報科学部をおく「長久手キャンパス」と看護学部をおく「守山キャンパス」を有する新愛知県立大学は、本年度に至るまで愛知県域におけるその時々的高等教育のニーズに呼応した教育・研究活動を展開してきている。

### ・学部・研究科・附置研究所等の構成

(学部)	外国語学部（英米学科、ヨーロッパ学科、中国学科、国際関係学科） 日本文化学部（国語国文学科、歴史文化学科） 教育福祉学部（教育発達学科、社会福祉学科） 看護学部（看護学科） 情報科学部（情報科学科）
(研究科)	国際文化研究科 人間発達学研究科 看護学研究科 情報科学研究科
(関連組織)	入試・学生支援センター 教育支援センター 教養教育センター 学術研究情報センター 地域連携センター 看護実践センター
(研究所)	多文化共生研究所 通訳翻訳研究所 文字文化財研究所 生涯発達研究所 情報科学共同研究所 次世代ロボット研究所
(関連施設)	大学附属図書館 講堂・学術文化交流センター

### ・ 学生総数及び教職員総数（平成29年5月1日時点）

(学生総数)：学部 3, 297名、大学院 233名

(教員総数)：233名

(教員以外の職員総数)：98名（職員38、派遣職員9、契約職員51）

# 第1章 自己点検・自己評価の様式

## 1. 1 自己点検・自己評価項目

平成27年度～平成29年度の3カ年の実績等を基にして、以下の項目について本年度の目標・計画に対する自己評価を行った。

### I 研究活動 (ウェイト %)

- 研究課題
- 学界動向と研究課題の関係
- 目標・計画
- 過去3年間の研究業績(特許なども含む)
- 科学研究費補助金等への申請状況、交付状況等(学内外)
- 自己評価

### II 教育活動 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 専門教育科目(講義・演習)
- 一般教育科目(講義・演習)
- 大学院授業科目
- 論文指導・研究指導
- 自己評価

### III 大学運営 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 学内委員など
- 自己評価

### IV 社会貢献 (ウェイト %)

- 目標・計画
- 学会活動など
- 地域連携・地域貢献など
- 自己評価

### V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学術交流など)

### VI 総括(リフレクションを含む)

## 1. 2 目標と自己評価

本年度も前年度の書式を継承し、年度はじめに目標・計画を記入し、報告書作成時に同一シートに結果と自己評価を追記する方法とした。また、自己評価について、3通りの文言のいずれかでまとめることにより客観性を持たせた。十分でない場合は必要に応じて改善策を記入することとした。以下に自己評価の項目を示す。

### <目標・計画、ウェイト>

年度はじめに目標・計画およびウェイト（合計が100%）を記入し、委員に提出する。

### <自己評価>

**研究活動、教育活動**の自己評価では、理由を記すとともに最後は下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり達成できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね達成した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・目標を十分達成した。
- ・おおむね目標を達成した。
- ・目標をあまり達成できなかった。

**大学運営**の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・大学運営に十分貢献した。
- ・大学運営におおむね貢献した。
- ・大学運営にあまり貢献できなかった。

**社会貢献**の自己評価では、理由を記すとともに、下記のいずれかの文言でまとめ、「あまり貢献できなかった」の場合は、その後に改善策を書くこと。「おおむね貢献した」の場合は、改善策があれば書くこと。

- ・社会に十分貢献した。
- ・社会におおむね貢献した。
- ・社会にあまり貢献できなかった。

### <総括>

全体の総括では、過年度の成果・課題をふまえて、リフレクション（教員自身の振り返り）を意識した記述に努めること。

自己点検自己評価の妥当性を高めるため、昨年度に引き続き、以下の項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制で形式面のチェックをし、満足しない場合は修正を依頼した。

- **目標・計画**
  - ・目標が記述してあるか
  - ・目標に対して具体的な計画が記述してあるか
- **研究業績、教育業績、学内委員、学会活動、社会貢献など**
  - ・具体的に記述してあるか
- **自己評価**
  - ・目標・計画の達成度等を含め、実績を基に自己評価されているか
  - ・「十分貢献達成した」、「おおむね貢献達成した」、「あまり貢献達成できなかった」のいずれかでまとめられているか
  - ・「あまり貢献達成できなかった」の場合は、その後に改善策などが書かれているか
- **総括**
  - ・リフレクションが含まれているかどうか



前年度に引き続き、自己点検自己評価の妥当性を高めるため、自己点検自己評価の各項目について本人以外（各学部で選出）の複数名体制（表1-1）で形式面をチェックし、チェック事項の条件を満足しない場合は修正を依頼した。

表1-1 チェック体制

学部	体制	備考
外国語学部	学部評価委員+5名	
日本文化学部	学部評価委員+1名	
教育福祉学部	学部評価委員+1名	
看護学部	学部評価委員+5名	学部に自己点検評価委員会を組織。
情報科学部	学部評価委員+1名	
教養教育センター	センター長・副センター長	



## 第2章 自己点検・自己評価結果の概要

自己点検・自己評価のうち、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献についての自己評価における達成度（十分達成／貢献、おおむね達成／貢献、達成／貢献できなかった）の割合を以下に示す。

### 1. 大学全体の達成度

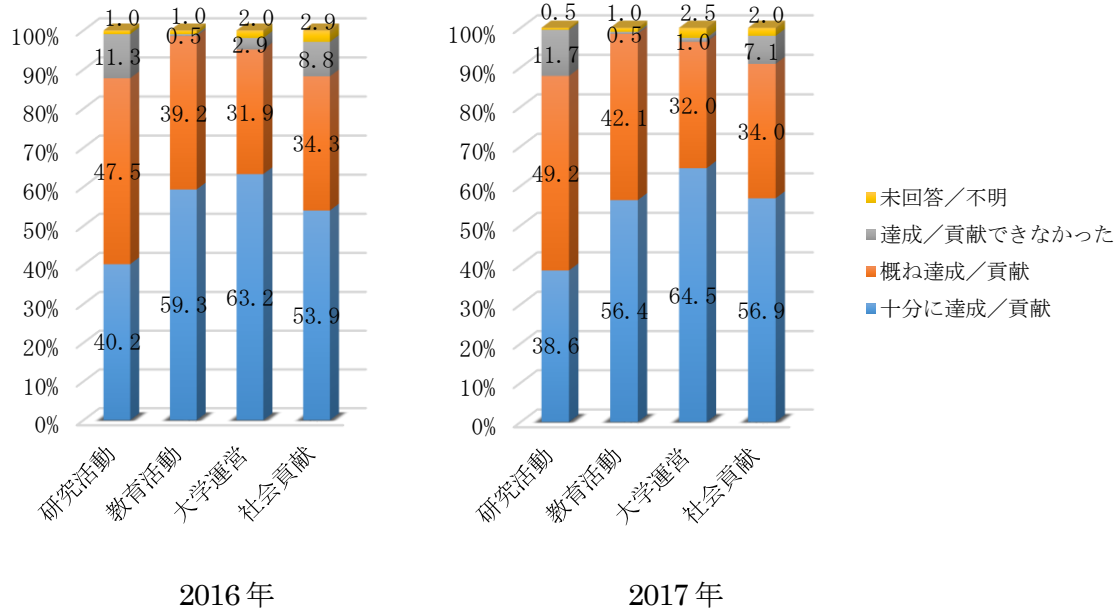


図2-1 達成度の割合（全体）

全学では、「研究活動」「教育活動」「大学運営」「社会貢献」の4項目のうち、「十分に達成／貢献」または「概ね達成／貢献」と回答している割合が最も高かった項目は、昨年度と同様、「教育活動」（98.5%）であり、僅差で「大学運営」（96.4%）が続く。他方、「十分に達成／貢献」に限定すると、「大学運営」が64.5%と突出して高く、昨年度に比べても比率が上昇している。もっともこれは、大学運営関係業務における達成感の大きさを表しているとは限らない。委員会等の活動に日々向き合う姿勢をアピールする意味もあるだろうし、場合によっては、業務による負担感の大きさを反映しているかもしれない。「研究活動」および「教育活動」において「十分に達成／貢献」の比率が低下気味であるのとは対照的である。「研究活動」と「社会貢献」については、学部によって達成度に関する自己評価の水準にかなりの違いがあり、そのことが各学部選出の評価委員が学部内の状況について取り纏めた所感にも表れている。詳しくは、次ページ以降を参照されたい。

次に、各学部の概要を図2-2～図2-6に示す。

## 2. 外国語学部

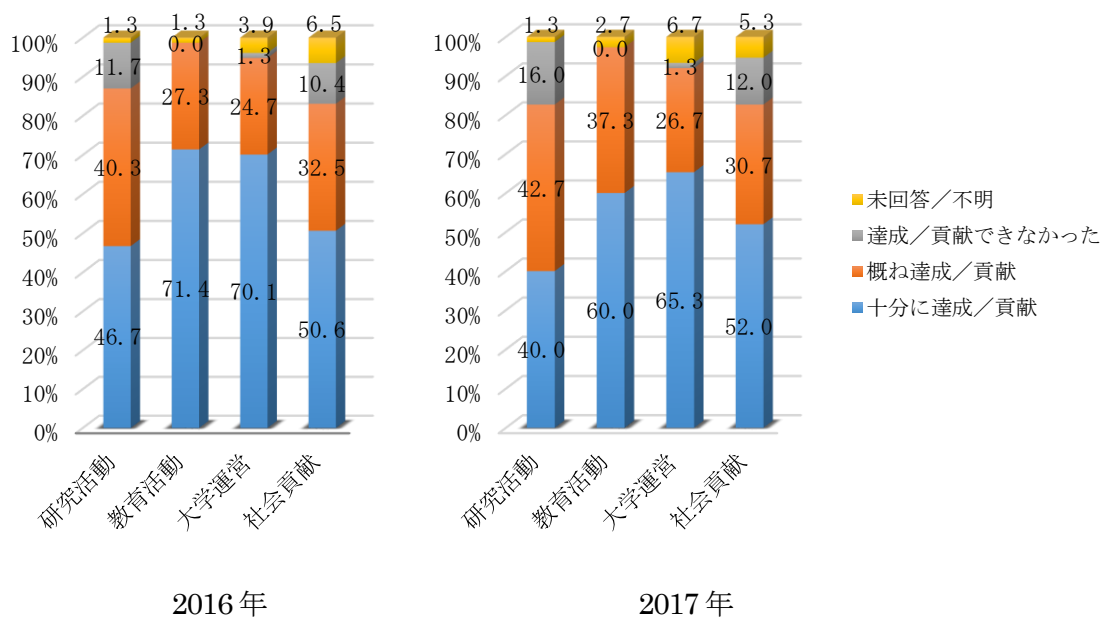


図2-2 達成度の割合 (外国語学部)

数年来の結果を通じて、教育活動に対する評価が高い点が顕著で、少人数クラスで行う語学や演習形式の授業をはじめ、教員が学生の諸地域研究への関心に即して、地道かつきめ細かな指導を行う姿勢が表れている。それに加え、今年度は大学運営に対する評価が、教育活動に対する評価を上回る兆候もみえており、限られた時間のなかで、柔軟な学生指導を試みる教員の努力が確認できる。

これら教育・大学運営に対する評価に相反して、研究活動に対する評価は今年度もまた低い。教員個人のハードル設定が高く設けられているケースを差し引いても、学内外の多種多様な活動を反映する社会貢献に対する評価と拮抗しているところに、地域密着型の大学で任務を果たそうとする教員のジレンマも見てとれよう。教員自身の研究が自己完結せず、より広い還元先を意識したものとなるよう、異種間の知的な研鑽のための場を築く努力が引き続き望まれる。

上記の点への言及も含め、およそ3分の2の教員が過年度の成果・課題を念頭に置いた取り組みをしていると考えられる。

### 3. 日本文化学部

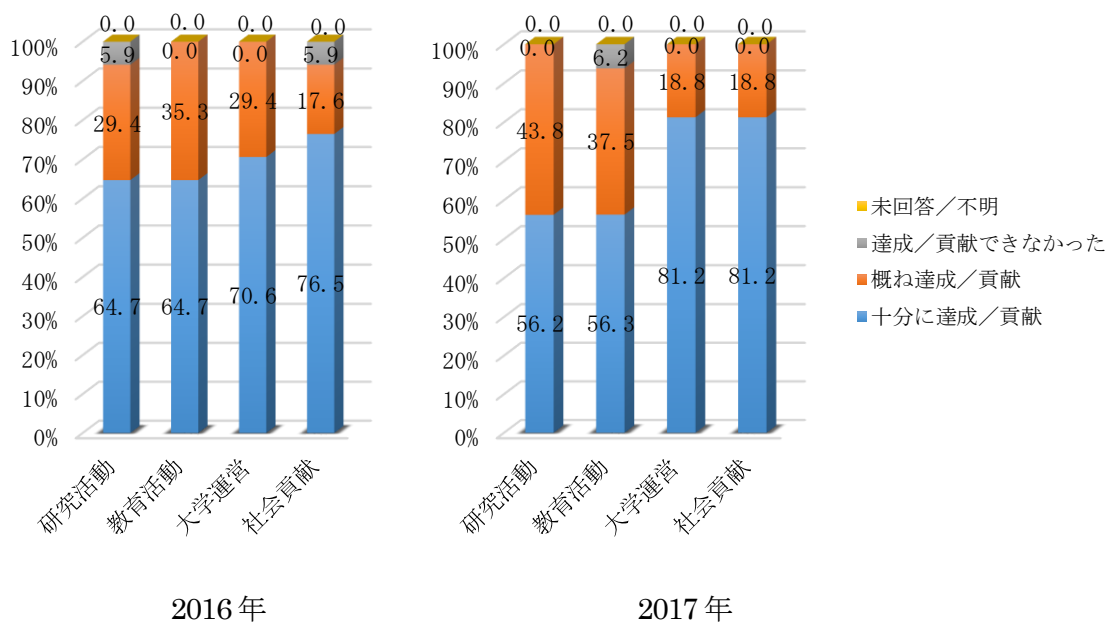


図2-3 達成度の割合（日本文化学部）

昨年度同様、学部教員の大半が「十分」または「おおむね」達成・貢献できていると評価している。但し研究活動・教育活動について、「十分」の割合が低下している。

研究活動・教育活動の評価が低下した要因として、教員自身のリフレクションから窺われることは、大学運営業務・社会貢献業務に力が割かれ、研究・教育活動にしわ寄せがいつているということである。大学全体の業務の総量（もちろん研究活動も含む）は、その総職員数×週 38.5 時間の範囲内に収まる（フルタイム教職員の場合。土日休日・自宅研修・出張等を含む）程度に留めるべきものであると思われる。またサバティカルの制度化も必要ではないだろうか。

そのような中でも、研究・教育に成果や手応えの得られた教員のあったことは慶ばしいことである。

#### 4. 教育福祉学部

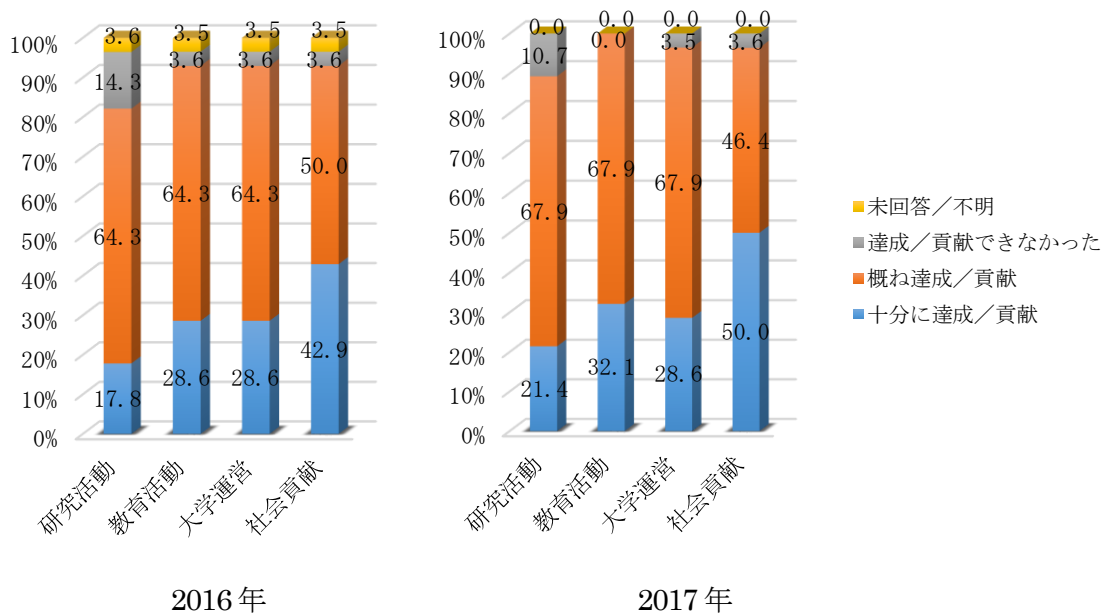


図2-4 達成度の割合 (教育福祉学部)

研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献ともに、ほとんどの教員が「十分に達成/貢献」あるいは「概ね達成/貢献」していた。なかでも社会貢献については、「十分に達成/貢献」した教員が最も多かった。また、教育活動については、「達成/貢献できなかった」教員はいなかった。複数の教員が、研究活動、教育活動、大学運営、社会貢献の「全体をとおして、おおむね目標を達成し、それぞれの領域で貢献できたと考えている」と自己評価しており、それが評価項目別実数にも表れていると考えてよいだろう。

社会貢献については、所属学会で理事や委員を務めるだけでなく、行政機関の各種審議会や委員会の委員あるいは委員長、社会福祉法人の理事や評議員、専門職等を対象とした研修会あるいは講演会の講師を務める教員が多くおり、研究活動によって得られた成果が、地域の教育および福祉へと生かされている様子が伺える。「SSW 教員研修・実践検討会、特別支援教育リーダー養成講座等」といった「現場教師の専門的実践力向上に貢献する活動」、「福祉現場で働く卒業生のフォローアップ活動」等も行われていた。

研究活動では、科研が採択された教員が多くおり、「国際誌への論文投稿を積極的に行っていききたい」、「国内他大学との関係を強め、共同研究の推進を進めていく」等、意欲的な抱負が示される一方で、「主となる研究課題を含む複数の課題を並行して進めることができていない」、「作業の効率化や諸活動のバランスの見直しを図りたい」、「時間の有効活用、計画的な研究活動を一層意識」するといった課題があがっていた。

## 5. 看護学部

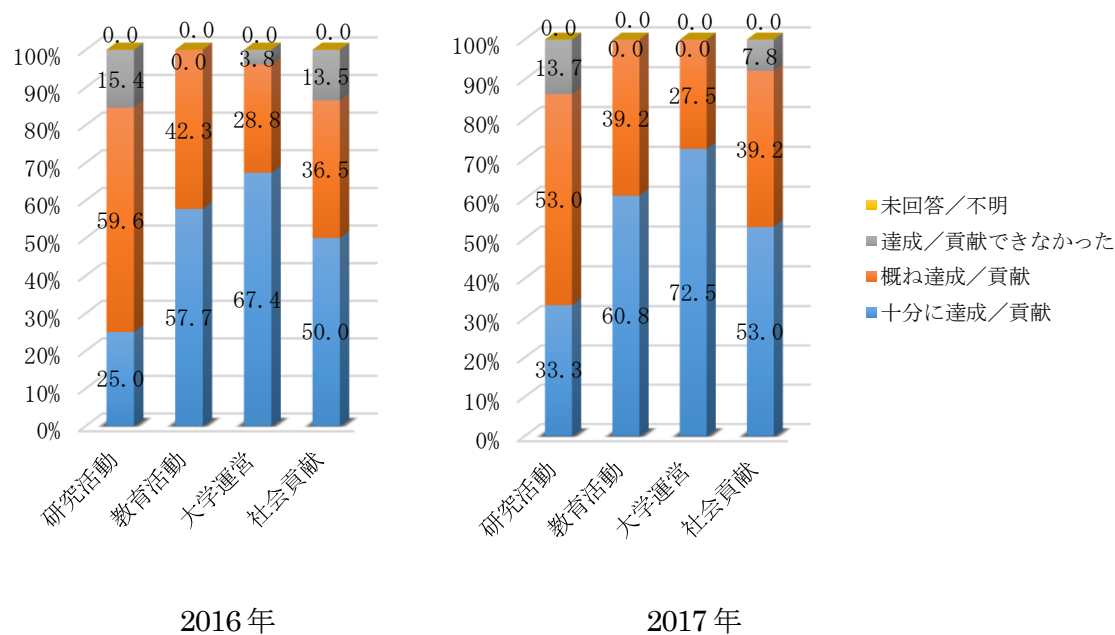


図2-5 達成度の割合（看護学部）

研究活動では、87.3%の教員が目標を十分に、あるいは概ね達成できたと評価し、昨年度の値を上回った。このことは論文発表や学会発表の数からも裏付けられる。一方、達成できなかったとの回答でも、自己の目標設定に対して厳しく評価した結果と解釈できるものが多い。以上から、看護学部は活発に研究活動し、目標をほぼ達成したと評価する。

教育活動では、全員が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。看護学部は必修の授業科目に加えて多くの演習や実習指導を行うが、全員が強い責任感と熱意をもって教育活動に取り組んだ結果と評価する。

大学運営でも、全員が目標を十分に、あるいは概ね達成できたと回答した。全教員が委員として何らかの委員会に所属しているが、実際にそこで活発な活動が行われた結果であると評価する。

社会貢献では、92.2%の教員が十分に、あるいは概ね目標を達成できたと評価した。この値は昨年より上がっており、ほとんどの教員が学外での学会運営、地域住民の健康増進活動、臨床看護師の研究支援等を意識して積極的に活動している結果と評価する。

これらの評価を総合すると、前年度と比べて目標達成度の数字はやや上昇したことからも、平成29年度の看護学部は、研究、教育、大学運営、社会貢献の全般にわたって活発に活動し、ほぼ目標を達成できたと判断できる。

## 6. 情報科学部

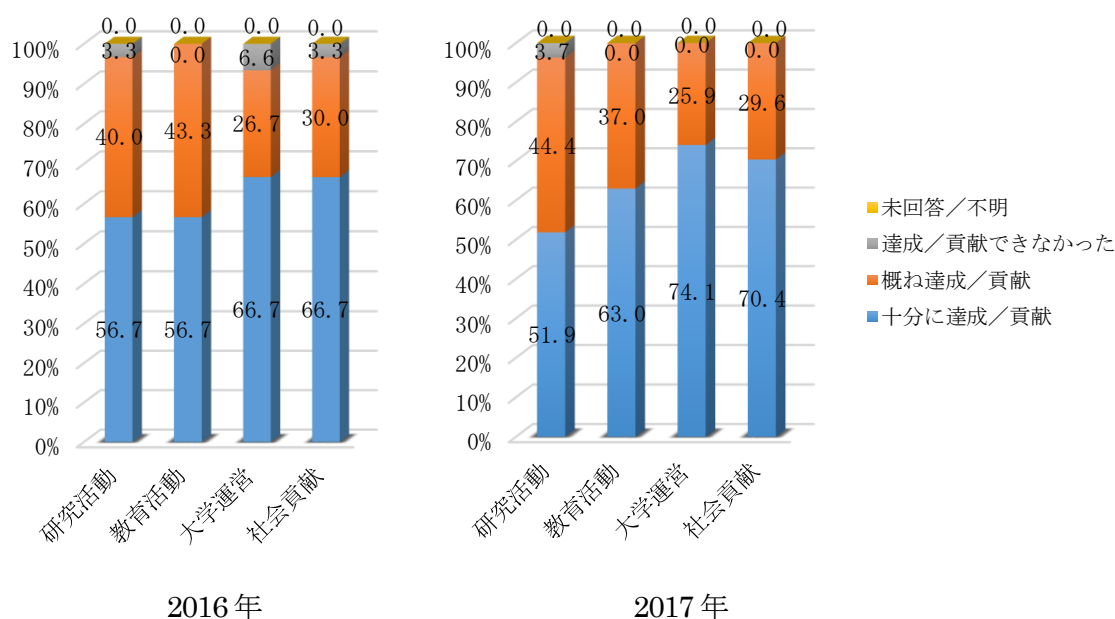


図2-6 達成度の割合 (情報科学部)

平成29年度においては、情報科学部全教員(27名)より自己点検・自己評価の報告があった。

全体に、年度初めに設定した目標・計画に対して「十分に達成・貢献」および「概ね達成・貢献」の評価が報告されており、情報科学部の研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献への高い達成度・貢献度と評価できる。

まず、研究活動では、年度初めに設定した目標・計画に基づいて、多くの論文、国際会議発表、国内学会発表等が実施されるとともに、科学研究費補助金等助成金の確保が行われていることがわかる。全体で52%の教員が「十分に達成」、44%の教員が「概ね達成」と回答しており、比較的高い達成度だといえる。

つぎに、教育活動においては、情報科学部の教員は多くの授業を担当しているにもかかわらず、学部・大学院への授業への工夫・努力が随所でみられる。全体で63%の教員が「十分に達成」、37%の教員が「概ね達成」と回答しており、高い達成度だといえる。

大学運営に関しては、全体的に多くの全学・学部委員会の委員を務めており、その役割を果している様子がうかがえる。全体で74%の教員が「十分に貢献」、26%の教員が「概ね貢献」と回答しており、高い貢献度だと判断できる。

最後に、社会貢献に関しては、多くの教員は学会活動に参加し、委員等を務めていることがわかる。また、様々な地域連携・社会貢献を行っている。全体で70%の教員が「十分に貢献」、30%の教員が「概ね貢献」と回答しており、高い貢献度だといえる。

前年度と比較すると、研究活動において達成状況が若干下がっているものの、教育活動の達成状況および大学運営・社会貢献の貢献状況は上がっており、前年度の報告書の結果を踏まえた上で本年度の目標・計画が成果につながっているものと考えられる。また、今年度の自己点検・自己評価の結果(総括)を踏まえての各教員における次年度の研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献への意気込み、積極的な取り組み、および現状の改善への意欲等が強く感じられる。



7. 評価項目別実数

自己点検・自己評価の評価項目ごとの実数を表2-1（2016年度）及び表2-2（2017年度）に示す。

表2-1 2016年度のデータ  
評価項目別の実数（大学全体）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	82	97	23	2
教育活動	121	80	1	2
大学運営	129	65	6	4
社会貢献	110	70	18	6

評価項目別の実数（外国語学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	36	31	9	1
教育活動	55	21	0	1
大学運営	54	19	1	3
社会貢献	39	25	8	5

評価項目別の実数（日本文化学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	11	5	1	0
教育活動	11	6	0	0
大学運営	12	5	0	0
社会貢献	13	3	1	0

評価項目別の実数（教育福祉学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	5	18	4	1
教育活動	8	18	1	1
大学運営	8	18	1	1
社会貢献	12	14	1	1

評価項目別の実数（看護学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	13	31	8	0
教育活動	30	22	0	0
大学運営	35	15	2	0
社会貢献	26	19	7	0

評価項目別の実数（情報科学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	17	12	1	0
教育活動	17	13	0	0
大学運営	20	8	2	0
社会貢献	20	9	1	0

表2-2 2017年度のデータ

評価項目別の実数（大学全体）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	76	97	23	1
教育活動	111	83	1	2
大学運営	127	63	2	5
社会貢献	112	67	14	4

評価項目別の実数（外国語学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	30	32	12	1
教育活動	45	28	0	2
大学運営	49	20	1	5
社会貢献	39	23	9	4

評価項目別の実数（日本文化学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	9	7	0	0
教育活動	9	6	1	0
大学運営	13	3	0	0
社会貢献	13	3	0	0

評価項目別の実数（教育福祉学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	6	19	3	0
教育活動	9	19	0	0
大学運営	8	19	1	0
社会貢献	14	13	1	0

評価項目別の実数（看護学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	17	27	7	0
教育活動	31	20	0	0
大学運営	37	14	0	0
社会貢献	27	20	4	0

評価項目別の実数（情報科学部）

項目	十分に達成 ／貢献	概ね達成 ／貢献	達成／貢献 できなかった	未回答／不明
研究活動	14	12	1	0
教育活動	17	10	0	0
大学運営	20	7	0	0
社会貢献	19	8	0	0



### 第3章 教員の自己点検・自己評価データ

(教員名簿、教員の自己点検・自己評価結果)

#### 3. 1 外国語学部

●英米学科	
阿南 東也	○木全 滋・・・・・・・・・・・・・38
○池田 周・・・・・・・・・・・・・18	○熊谷 吉治・・・・・・・・・・・・・40
○石原 覚・・・・・・・・・・・・・20	○袖川 裕美・・・・・・・・・・・・・42
○榎本 洋・・・・・・・・・・・・・22	○中島 醸・・・・・・・・・・・・・44
△エレノア・ロビンソン・山口	○中村 不二夫・・・・・・・・・・・・・46
○デミエン・オオカドゴーフ・・・・・・・・・・・・・24	○リチャード・マーク・ニクソン・・・・・・・・・・・・・48
○大野 誠・・・・・・・・・・・・・26	△クリストファー・ハーウッド
○大森 裕實・・・・・・・・・・・・・28	○久田 由佳子・・・・・・・・・・・・・50
○奥田 泰広・・・・・・・・・・・・・30	○広瀬 恵子・・・・・・・・・・・・・52
○小澤 正人・・・・・・・・・・・・・32	○松本 三枝子・・・・・・・・・・・・・54
○ワキーン・エマニュエル・カステヤーノ・・・・・・・・・・・・・34	○村山 瑞穂・・・・・・・・・・・・・56
○梶原 克教・・・・・・・・・・・・・36	○森田 久司・・・・・・・・・・・・・58
●ヨーロッパ学科 フランス語圏専攻	
○天野 知恵子・・・・・・・・・・・・・62	○中田 晋自・・・・・・・・・・・・・72
○アンヌ＝クレール・カシウス・・・・・・・・・・・・・64	○長沼 圭一・・・・・・・・・・・・・74
○伊藤 滋夫・・・・・・・・・・・・・66	○原 潮巳・・・・・・・・・・・・・76
○岸本 聖子・・・・・・・・・・・・・68	△フランク・モラル
○佐藤 久美子・・・・・・・・・・・・・70	○野内 美子・・・・・・・・・・・・・78
●ヨーロッパ学科 スペイン語圏専攻	
○糸魚川 美樹・・・・・・・・・・・・・82	○田中 敬一・・・・・・・・・・・・・92
○江澤 照美・・・・・・・・・・・・・84	○谷口 智子・・・・・・・・・・・・・94
○奥野 良知・・・・・・・・・・・・・86	○リディア・サラ・・・・・・・・・・・・・96
○小池 康弘・・・・・・・・・・・・・88	○フランスコ・ピエル・ロペス・トリゲス・・・・・・・・・・・・・98
○竹中 克行・・・・・・・・・・・・・90	○渡会 環・・・・・・・・・・・・・100
●ヨーロッパ学科 ドイツ語圏専攻	
○池田 利昭・・・・・・・・・・・・・104	○平井 守・・・・・・・・・・・・・114
○今野 元・・・・・・・・・・・・・106	○ザシャ・モンホフ・・・・・・・・・・・・・116
○櫻井 健・・・・・・・・・・・・・108	○山本 順子・・・・・・・・・・・・・118
○杉原 周治・・・・・・・・・・・・・110	○ヤン・ゲリット・シュトラーラ・・・・・・・・・・・・・120
○人見 明宏・・・・・・・・・・・・・112	○四ツ谷 亮子・・・・・・・・・・・・・122
●中国学科	
○王 幼敏・・・・・・・・・・・・・126	○孫 徳坤・・・・・・・・・・・・・136
○川尻 文彦・・・・・・・・・・・・・128	○月田 尚美・・・・・・・・・・・・・138
△工藤 貴正	○中西 千香・・・・・・・・・・・・・140
○黄 東蘭・・・・・・・・・・・・・130	○西野 真由・・・・・・・・・・・・・142
○小座野 八光・・・・・・・・・・・・・132	○吉池 孝一・・・・・・・・・・・・・144
○鈴木 隆・・・・・・・・・・・・・134	

●国際関係学科	
○秋田 貴美子・・・・・・・・・・148	○半谷 史郎・・・・・・・・・・162
○東 弘子・・・・・・・・・・150	○福岡 千珠・・・・・・・・・・164
○亀井 伸孝・・・・・・・・・・152	○藤倉 哲郎・・・・・・・・・・166
○木下 郁夫・・・・・・・・・・154	○宮谷 敦美・・・・・・・・・・168
○草野 昭一・・・・・・・・・・156	○矢野 順子・・・・・・・・・・170
○高阪 香津美・・・・・・・・・・158	○山下 朋子・・・・・・・・・・172
○高橋 慶治・・・・・・・・・・160	○エドガー・ライト・ポープ・・・・・・・・174
●多文化共生研究所	
○杉山 三郎・・・・・・・・・・178	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 2 日本文化学部

●国語国文学科	●歴史文化学科
○伊藤 伸江・・・・・・・・・・184	○井戸 聡・・・・・・・・・・202
△大野 出	○大塚 英二・・・・・・・・・・204
○久保菫 愛・・・・・・・・・・186	○上川 通夫・・・・・・・・・・206
○中根 千絵・・・・・・・・・・188	○川畑 博昭・・・・・・・・・・208
○福沢 将樹・・・・・・・・・・190	○中島 茂・・・・・・・・・・210
○三宅 宏幸・・・・・・・・・・192	○服部 亜由未・・・・・・・・・・212
○宮崎 真素美・・・・・・・・・・194	○樋口 浩造・・・・・・・・・・214
○本橋 裕美・・・・・・・・・・196	○丸山 裕美子・・・・・・・・・・216
○若松 伸哉・・・・・・・・・・198	△與那覇 潤

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 3 教育福祉学部

●教育発達学科	●社会福祉学科
○伊藤 稔明・・・・・・・・・・222	○宇都宮 みのり・・・・・・・・・・254
○稲嶋 修一郎・・・・・・・・・・224	○大賀 有記・・・・・・・・・・256
○内田 純一・・・・・・・・・・226	○田川 佳代子・・・・・・・・・・258
○葛西 耕介・・・・・・・・・・228	○湯 海鵬・・・・・・・・・・260
○久保田 貢・・・・・・・・・・230	○中尾 友紀・・・・・・・・・・262
○瀬野 由衣・・・・・・・・・・232	○中藤 淳・・・・・・・・・・264
○高橋 範行・・・・・・・・・・234	○野田 博也・・・・・・・・・・266
○田村 佳子・・・・・・・・・・236	○橋本 明・・・・・・・・・・268
○藤原 智也・・・・・・・・・・238	○松宮 朝・・・・・・・・・・270
○堀尾 良弘・・・・・・・・・・240	○村田 一昭・・・・・・・・・・272
○丸山 真司・・・・・・・・・・242	○山本 かほり・・・・・・・・・・274
○三山 岳・・・・・・・・・・244	○吉川 雅博・・・・・・・・・・276
○望月 彰・・・・・・・・・・246	○渡邊 かおり・・・・・・・・・・278
○山本 理絵・・・・・・・・・・248	
○渡邊 眞依子・・・・・・・・・・250	

○：提出、△：長期出張、10月着任、長期休暇、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出



### 3. 4 看護学部

●看護学科	
○天木 伸子	284
○天草 百合江	286
○石光 芙美子	288
○牛島 佳代	290
○宇城 令	292
○益 加代子	294
○大原 良子	296
○岡田 悦政	298
○岡本 和士	300
○荻 あや子	302
○鬼塚 知里	304
○尾沼 奈緒美	306
○籠 玲子	308
○賀沢 弥貴	310
○糟谷 久美子	312
○片岡 純	314
○片岡 由美子	316
○片平 正人	318
○神谷 摂子	320
○汲田 明美	322
○黒川 景	324
○小松 万喜子	326
○佐藤 美紀	328
○柴 邦代	330
○清水 宣明	332
○下園 美保子	334
○杉山 希美	336
○曾田 陽子	338
○田上 恭子	340
○戸田 由美子	342
○中戸川 早苗	344
○西尾 亜理砂	346
○西岡 裕子	348
△西川 みゆき	
○西脇 可織	350
○服部 淳子	352
○馬場 美幸	354
○平野 明美	356
○広瀬 会里	358
○深田 順子	360
○藤野 あゆみ	362
○古田 加代子	364
○松岡 広子	366
○三尾 亜喜代	368
○箕浦 哲嗣	370
○百瀬 由美子	372
○柳澤 理子	374
○山田 浩雅	376
○横山 加奈	378
○米川 美那	380
○米田 雅彦	382
○渡邊 直美	384

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 5 情報科学部

●情報科学科	
○伊藤 正英 . . . . . 390	○小林 邦和 . . . . . 418
○入部 百合絵 . . . . . 392	○代田 健二 . . . . . 420
○臼田 毅 . . . . . 394	○鈴木 拓央 . . . . . 422
○大久保 弘崇 . . . . . 396	○田坂 浩二 . . . . . 424
○太田 淳 . . . . . 398	○辻 孝吉 . . . . . 426
○奥田 隆史 . . . . . 400	○田 学軍 . . . . . 428
○小栗 宏次 . . . . . 402	○戸田 尚宏 . . . . . 430
○何 立風 . . . . . 404	○永井 昌寛 . . . . . 432
○粕谷 英人 . . . . . 406	○平尾 将剛 . . . . . 434
○金森 康和 . . . . . 408	○村上 和人 . . . . . 436
○神谷 直希 . . . . . 410	○山村 毅 . . . . . 438
○神谷 幸宏 . . . . . 412	○山本 晋一郎 . . . . . 440
○神山 斉己 . . . . . 414	○吉岡 博貴 . . . . . 442
○河中 治樹 . . . . . 416	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 6 入試・学生支援センター

●国際交流室	
○桑村 昭・・・・・・・・・・・・・・・・448	

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 7 教養教育センター

●教養教育センター	
○アリン ロジャー・・・・・・・・・・454	○ジョシュ ブルノティ・・・・・・・・・・458
○アンドレア カールソン・・・・・・・・・・456	○松井 ヘイアブリル・・・・・・・・・・460

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

### 3. 8 グローバル実践教育推進室

●グローバル実践教育推進室	
○ブレット ハック・・・・・・・・・・・・	4 6 6

○：提出、△：長期出張、長期休暇、10月着任、転出などの理由で提出不可能、無印：未提出

## おわりに

本学の自己点検・自己評価報告書作成は、平成18年度に始まった。それから10年余りが経った現在の課題は、教員個人が1年間の仕事を総括し、次の課題を確認するために、報告書作成の機会をいかしてもらうことにはほぼ尽きると考えている。

以下、今年度の評価委員会で合意したこと、提起された主な意見をまとめることで、委員長としての締め括りとする（すでに定型化した委員会活動に関する審議事項は除く）。

### 【合意事項】

■報告書作成に関わる委員長からの依頼および各学部教授会でのアナウンスを通じて、総括欄にリフレクション（教員自身による振り返り）に関わる記述を盛り込んでもらうよう、意識喚起する。

■今年度より、総括欄にリフレクションが盛り込まれているかどうかを原稿チェック時の確認事項に加える。ただし、原則として修正依頼の対象とはしない。

■報告書冊子（ディスク）作成時には、リフレクションに関する意識向上策の効果に関するコメントを各学部の所感に盛り込む。

■来年度より報告書の様式を一部修正し、「VI 総括」を「VI 総括（リフレクションを含む）」とする。

### 【主な意見】

■自己点検・自己評価の本旨は、教員自らによる振り返りにある。そうした趣旨に関する教員の意識喚起については、報告書執筆依頼時に委員長から説明が行われており、今後も、同様の取組みを継続するという方針でよいと思う。

■自己点検・自己評価報告書の中で、とくに総括（項目別自己評価および全体総括）をまとめるさいに自己の振り返り（過年度の成果・課題をふまえた取り組み）を意識してもらうよう、働きかけるとよいのではないかと。

平成29年度評価委員会委員名簿

	学部等	委員名
学部選出の教育研究審議会委員	外国語学部	竹中 克行（委員長）
	日本文化学部	宮崎 真素美
	教育福祉学部	橋本 明
	看護学部	片岡 純
	情報科学部	戸田 尚宏
各学部選出委員	外国語学部	四ツ谷 亮子
	日本文化学部	福沢 将樹
	教育福祉学部	中尾 友紀
	看護学部	清水 宣明
	情報科学部	永井 昌寛
事務部門長		若子 直
オブザーバー	副学長	神山 斉己

愛知県立大学  
教員の自己点検・自己評価  
— 自己点検・自己評価報告書 —

平成30年3月発行

編集・発行

愛知県立大学 教育研究審議会 評価委員会

〒480-1198 (個別番号)

愛知県長久手市茨ヶ廻間1522番3

TEL 0561-64-1115

FAX 0561-64-1101

E-mail [soumuka@puc.aichi-pu.ac.jp](mailto:soumuka@puc.aichi-pu.ac.jp)